

つむぐあかり

銀座・京橋・日本橋をつなぐ人と光の川

その昔、川にかかる橋のたもとや周りには生き生きした人やモノの行き交う風景があった。

流れや風景が、光のつながりのなかで再び現れてほしいと思う。

あかりをつむぎあわせること。

風景をゆるやかにつむいでいくこと。

場をつむいでいくこと。

あかりが作り出す様々な光景は、新しい中央通りの個性として息づいていく。

diagram / 照明灯の考え方とカタチ



01. 京橋, 日本橋, 銀座の本質的な連続性と方向による分断性

この地区はもともと物流や産または水上交通でつながっており、現在は中央通りが文字通りひとつながりにしているが、各地区で抱えている産業や背景は異なり、また上図のように方向性が日本橋などで角度を持ちながらつながるため、分断しており、結果として地域のつながりや一体感を得られにくい。今後の発展の上で「2.9kmひとつながり」という新しい町の担い手としての照明を作りたい。



既存 / 垂直性と水平性を持ちながら等ピッチで連続していくため、場が硬直化し、留まりにくい。

新設 / 全体をつなぐことを考えてみる。緩やかにつながる波線。2.9km つむぎあわせることで通りの一体性を表現したい。

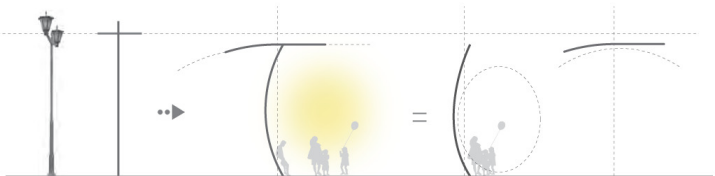


一灯一灯が波線をなできるように灯具の腕を設定する。あかりのカタチによって京橋・日本橋・銀座をつないでいく。



02. 現在の中央通りと、つなぐことで変わっていく中央通り

現状の照明灯は垂直水平の直線要素で作られている。また照明器具が点として感じられるために、存在感や意味という点でガス灯というモチーフに委ねているという特性を持つ。意識的に、カタチで全体をつなぐことをしたいと考えた。つむがれていく光景や一体感は、中央通りの新しい個性になっていくのではないだろうか。



垂直な柱をまるめることでひととひとの溜まりを作りたい。既存の照明灯のカタチの水平、垂直性を捉えなおすことで場が足元に生まれる。腕を伸ばし、それが続いていくことで得られるつながり。

03. 場を作り出すカタチ、いくつもの場を作り出す連なり。

晴れた日にふと立ち止まる木漏れ日の下のようひととひとがとどまる、または場をやさしく包み込むカタチを作りたい。ちょっと足を留めるだけでも、または小休止のために一定時間たむろう場所でもよい。カタチで操作をする。また灯具の腕は 2.9km のつながりと、緩やかなカタチに見せることにはたらく。

pattern of lighting pole / 部材のモジュール化と組合せによるバリエーション

	a	b	c	b	a
	r=4500 w=4500	r=4500 w=4500	r=4500 w=4500	r=4500 w=4500	r=4500 w=4500
1	() R=4500 h=4500	1a	1b 1b'	-	-
2	() R=6000 h=6000	2a	2b 2b'	2c 2c'	2b'' 2b''' 2a'
3	() R=7500 h=7500	-	-	3b 3b'	3a'

↓

1b' 2c 3b 2c' 2c 3b' 3b' 2c 1b' 1b' 2b''' 2c 3b 3b'

部材を単純化するために、柱と灯具の二つで考えることとする。柱の高さを h=4500,6000,7500 の 3 種類、灯具の腕を w=4500 で曲線の向きで a,b,c の 3 種類とした。4500 未満には高さは下がないもの、また 7500 以上には上がないものと設定すると上記の通り計 14 種類のカタチによって全体を構成することができる。また高さや向きによって、照明灯の画一的なデザインによらない全体性を持つことができる。



銀座 / ひかりとひととびとが風景を緩やかにつないでいく

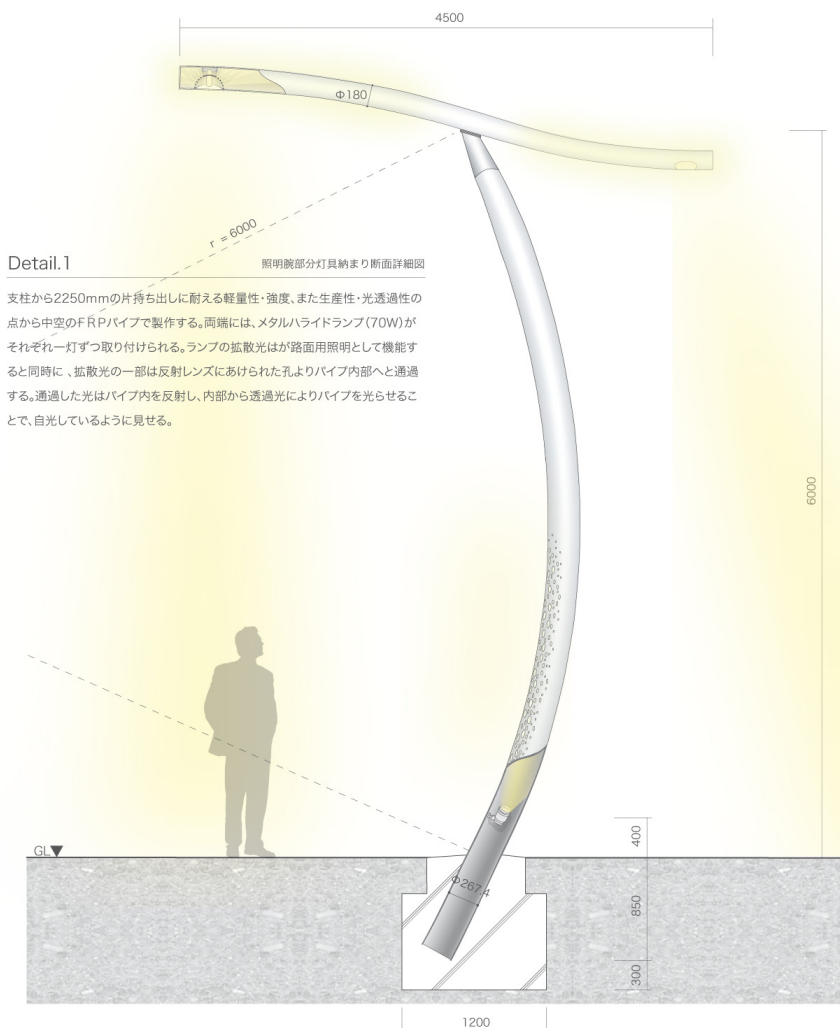


京橋 / 夜のオフィス街をつないでいく



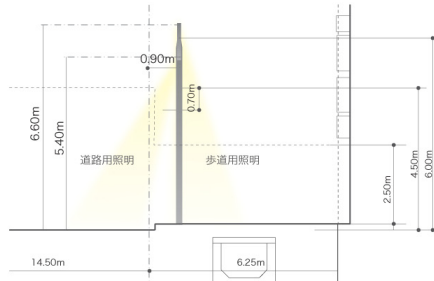
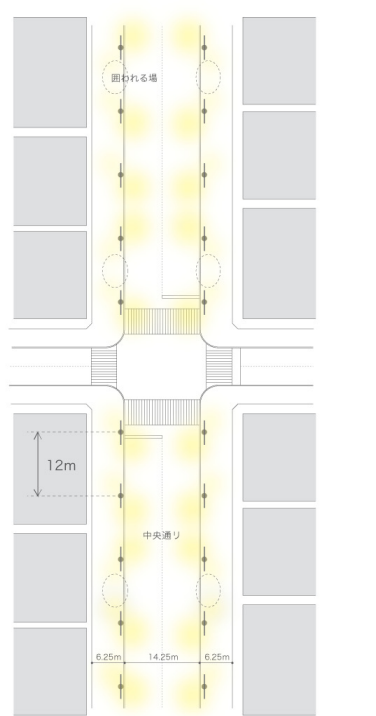
日本橋 / 照明灯が隔てられた場所を緩やかにつないでいく

Light plan and Lighting pole detail / あかりの仕組みと照明灯の仕様、詳細について



Detail.1

照明腕部分灯具納まり断面詳細図
支柱から2250mmの片持ち出しに耐える軽量性・強度、また生産性・光透過性の点から中空のFRPパイプで製作する。両端には、メタルハイドランプ(70W)がそれぞれ一灯ずつ取り付けられる。ランプの拡散光はが路面用照明として機能すると同時に、拡散光の一部は反射レンズにあげられた孔よりパイプ内部へと通過する。通過した光はパイプ内を反射し、内部から透過光によりパイプを光らせることで、自光しているように見える。



Dimension Diagram

照明灯の寸法、配置

全体の照度や均斉度を考え、ピッチを 12m とした。このことでまず光源のワット数を低くでき、腕の両端をそれぞれ道路用、歩道用とすることで道路に対して平行な腕を可能にした。高さは 6m の場合で、約 120cm の高低差を上下に生む。光の役割や器具の位置が変わっていくことで多様な光の光景が現れる。

Detail.2

照明灯根入れ断面詳細図

支柱はφ267.4 t=9.3の一般構造用鋼管を熱間曲げにより成形する。支柱の曲げは支柱高さと同長の半径の円弧であり、曲がりの内側には30.15.10mmの孔がアトラダムに空けられている。支柱の内部足元には上向きに照明が取り付けられ、光は内部を反射しながら上へ向かう。曲がりの内側に空けられた穴から反射光がにじみ出る。